





童謡のまちづくりについて  
話す山田町長

# と童謡

で47年目でしようかね。子どもの歌を歌ってきました。

**司会** 次に、お二人が感じている童謡の魅力について話をお聞きしたいと思います。お二人は童謡の魅力をどのように感じていますか？

**町長** 私に孫ができていっしょに童謡を聴くようになりしました。童謡とはこんなにも大人の目を潤ませるものかということを感じました。車に乗った子どもにも童謡のCDを聴かせてあげるとあつという間に寝てしまっんですよね。そのときの子どもの寝顔がもう本当に安心した顔なんです。童謡は子どもに安心感や癒しを与えてくれると思うんです。そして童謡は何度聴いても飽きないです。

本当に童謡はすばらしいものです。子どももいっしょになって歌うんですが、その姿がとてもほほえましいです。童謡をこうして聴くことが出来るということは大使からの贈り物なのかなと感じております。

**大使** そうおっしゃっていただくありがたいです。私自身はやはり童謡というのは唱歌と童謡とあって、このことをどっちが唱歌で童謡でと言ひ出すとすごく面倒なことになるのです。が、両方含めて、子どもの歌っ

て考えたときに、すばらしいものがたくさんありますよね。その中で、子どもに何か与えようということをお二人が考えて、できるだけたくさんのお二人を最小の言葉で、つまり一番短いかたちになるように言葉を選んで、いらぬものは全部捨て去って、そして、それにとってもいい旋律をつけて作ったものが童謡であると思うんです。それには媚があつてはいけないうようなことがしつかりありますので、さきほど町長がおっしゃったとおり、飽きが来ないんです。そういう意味では純度の高い、お米のぬかがとれて、大事なものが残つたようなくらい童謡の中にはいい歌がありますよね。

**町長** その童謡のよさといますか癒しやなにか魅力的な部分を少しでも町民の方に感じ取っていただきたいと思つています。今、心の荒んだような事件など世の中を悲しくさせることがたくさんあります。広野町の町民の皆さんに童謡を聞いていただいても癒しになればと思ひまして、JR広野駅の発車ベルを「とんぼのめがね」と「汽車」のメロディーにしました。時報は朝が「汽車」、お昼は「広野賛歌」、夕方は「とんぼの

めがね」のメロディーを流しています。町民の皆さんからは、短いのもうちよつと長く流してくれないかということがあって、今後考えてみたいと思つています。今回、広野駅の発車ベルをメロディー化して非常にうれしかったのは、電車から降りてくるお客さんが発車メロディーにあわせて歌いながら電車から降りてくると、そういう光景があつたことです。また、童謡が流れていて疲れがとれる、朝も楽しくいけるといふような話が出ています。このようなお話を町民の皆さんからお聞きすると非常に意味があつたことと感じております。

われわれが、何か、こういう世の中なので童謡を求めているのです。

**大使** 子どもたちももちろん歌う場とか、歌う雰囲気、歌う条件のようなものを整えてもらえば、子どもは歌が大好きなんです。今、なかなか、親と子そして、その祖父祖母の縦のつながりというものが家のなかで希薄なものですから、なかなか、一つの歌を家中で歌うことがないんです。小さいときになんとなく家のなかで歌っていた歌が、その時にはいっしょに歌っていないけれども体の中に染

みていて、ある日、その人が大人になつたとき、例えば広野の駅を降りたときに「あつ、この歌は聴いたことのある歌だ」って思つたりすることが、もう少し年をとつたときに癒しにつながっていくと思つておられます。だから時間的にはちよつと、長くなるんです。

**町長** そうですね。

**大使** それで、子どもたちの生活に染みてしまえばいい。というところで広野からたくさん新しい歌をつくっていただけてます。が、他じゃなくて自分たちの所で生まれた歌だと、「ザリガニくん」ってどこかで聴いた歌だ。これは自分たちの歌じゃないかというふうになると、すごくいいと私たちは思つております。

**町長** そうです。私が県にPRに行つたときも広野町は教育を含め童謡でまちづくりを進めていますとお話しています。子どもたちが成長していくなかで悩んだり、苦しんだり、困難な壁にぶつかると思ひます。歌がそんな困難を乗り越えていく一つの支えになってくれるのではないかと思ひます。童謡を口ずさんでいけるような大人に育つてほしい。物事に感動したり、真剣になつて考え抜いたり、そう